



平成 29 年度花巻市共同企画展
ぐるっと花巻再発見！

**及川全三と
岩手のホームスパン**

12/9 (土)～翌 1/28 (日)
HANAMAKI CITY MUSEUM

ストール (茶) 部分：当館蔵
そのほか上着・ストール部分：光原社蔵

「ホームスパン」とは、もともと家庭で紡いだ糸という意味でしたが、時代とともに手紡ぎ・手織りの毛織物を指すようになっていきました。そのホームスパンに「植物染」の技術を導入し、美術的な価値を与え、工芸品にまで高めた人物が及川全三おいかわぜんぞう (1892～1985) です。

全三は、1892 (明治25) 年に和賀郡十二箇村 (現、花巻市東和町土沢) に生まれ、岩手師範学校 (現、岩手大学教育学部) を卒業後、盛岡市や東京都の小学校教師を経て、慶応幼稚舎に勤めます。その後、柳宗悦の民藝運動に感銘を受け、出身地・東和町で作られていたホームスパンに植物染技術を導入するなど、ホームスパンの製作と指導に生涯を捧げました。

近年、及川全三や岩手のホームスパン研究も進みつつある中で、本展覧会では、及川全三のホームスパン工芸への取り組みや民藝運動を提唱した柳宗悦との交流などについて所蔵資料とともにご紹介します。

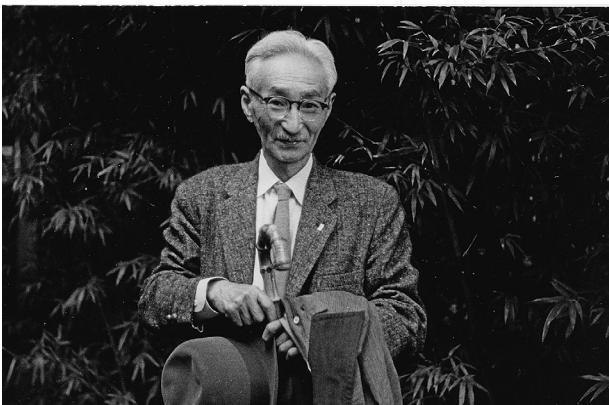
及川全三と岩手のホームスパン

期間：平成29年12月9日(土)～平成30年1月28日(日)

■はじめに

「ホームスパン」とは、もともと家庭で紡いだ糸という意味でしたが、時代とともに手紡ぎ・手織りの毛織物を指すようになっていきました。その原産地はイギリスのスコットランドやアイルランド地方といわれています。

そのホームスパンに「植物染」の技術を導入し、美術的な価値を与え、工芸品にまで高めた人物が及川全三(1892～1985)です。



及川全三（写真／個人蔵）

■及川全三について

及川全三は、1892（明治25）年に和賀郡十二鎚村（現、花巻市東和町土沢）に生まれ、1906（明治39）年に、十二鎚村立土澤尋常小学校を卒業しました。全三の兄・優曹の回顧録には、「絵がすきで、よく水彩などを描いていたが、絵筆は着物のどこへでもぬって拭いた」と記されており、幼少期より、絵に興味をもっていた様子が窺えます。

1914（大正3）年、岩手県立師範学校（現、岩手大学教育学部）を卒業後、盛岡市立城南小学校、慶應義塾幼稚舎などに勤務します。しかし、柳宗悦の民藝運動に感銘を受けて、工芸の道へと進み、勤

めていた慶應義塾幼稚舎を退職。1933（昭和8）年頃に帰郷して、ホームスパン製作に取り組みます。

■全三とホームスパン

全三がホームスパンに取り組む契機は、以下のようなものでした。慶應義塾幼稚舎の教員で同僚であった吉田小五郎を介して柳宗悦と出会い、柳からイギリスの染織家エセル・メレのホームスパンを見せられ、染織工芸の道を勧められたのです。柳との出会いの時期は、慶應義塾幼稚舎を辞職した1927（昭和2）年から、柳が海外へ赴く1929（昭和4）年の間と考えられます。

また、全三は、1931（昭和6）年頃、郷里を同じくする東京杉並区の梅原家に同居しており、梅原家の郷里の父・弥蔵から送られてくるホームスパンを見て、非常に関心を持っていたことも注目されます。梅原家の母・乙子は、1921（大正10）年頃、盛岡で開催された羊毛加工講習会に参加して、ホームスパンを製作していました。

■ホームスパン工芸への取り組み

全三は自家消費ではなく、商品としてのホームスパン製作のために「美しいホームスパン」の製作が必要と考えました。柳から言われた「植物染でないとホームスパンではない」ということを守り、何度も七輪・鍋で試験しながら、羊毛の染色技術を研究しました。そして、東京在中、5年かけてホームスパンの染色技術を完成させました。1933（昭和8）年頃に帰郷した全三は、ホームスパンの染色技術の過程で習得した、植物性染料と染色化学の専門知識を色染和紙に活用しようと考えます。そこで、成島和紙工場の菅木友次郎に協力を依頼し和紙の草木染

が成功することとなります。

全三は、1936（昭和11）年にホームスピンの研究成果として、『羊毛本染実験覚書』を出版します。そこには岩手県産の染草やホームスパンに適した染草の条件などが詳しく紹介されていますが、従来から伝わる染草は絹や綿を染めるためであり、羊毛に使用する染草とは異なることを説明しています。



『羊毛本染実験覚書』
（昭和11年、当館所蔵）

このような功績が認められ1937（昭和12）年には、和紙染色技術において農林大臣賞を受賞、和紙およびホームスパン作品に関して日本民藝会長賞を受賞しました。また、全三は岩手県のホームスパン産業を育てるため、各地に出向いてその技術を伝え歩いたりもしました。

ところで、ホームスピンの製作において全三自身は、機を織る作業を一切せず、実際に織るのは福田ハレをはじめとする弟子たちであったようです。全三自ら織ることはしませんでした。織の組織図は自身でデザインして、設計図を描いていたといいます。

■柳宗悦との交流

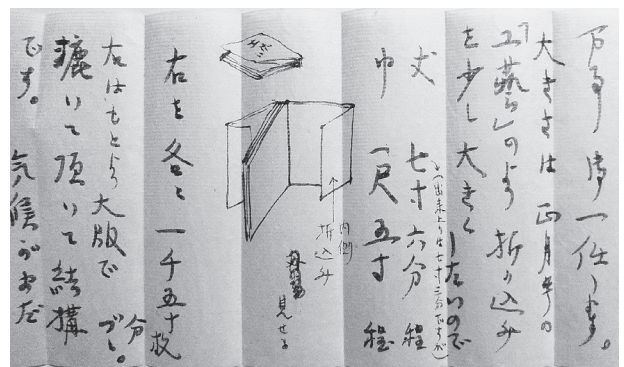
全三の製作活動には、柳宗悦の影響が大きく関わっており、全三と柳との交流については書簡や葉書を通じて知ることができます。ふたりの交流は、全三が帰郷してから柳が亡くなる年まで続き、昭和初期の経済更生運動が勧められた時期から太平洋戦争、戦後の復興期、高度経済成長期にいたるまでのものです。

書簡・葉書の内容は、「ホームスパン」「和紙」「御礼状その他」「疎開」と4つに分類でき、「ホームスパン」に関しては、作品に関する批評や柳からの注

文依頼、個展に関することが記されています。

全三宛の書簡には、ホームスピンの形も柄も織り方も好きであるものの、「^{ただ}只色が少し派手で、病人の小生には少し似合はないと皆から評されています」、「少し、くすむ^{よう}様に染めること」は難しいか等と記されており、全三の作品に対しての批評や助言をしていることがわかります。

その他、書簡には、民藝運動に関わった様々な人物の名が見え、一線で活躍した濱田庄司や芹沢銈介、棟方志功、バーナード・リーチなどの名前も確認できます。



全三宛柳宗悦書簡（昭和12年3月15日付）
雑誌『工藝』の表紙製作依頼（当館所蔵）

分館の東和ふるさと歴史資料館（休館中）には、ホームスパンや和染和紙、民藝に関する資料、柳宗悦との交流を示す書簡など約500点の資料が収蔵されています。

本展覧会では、及川全三のホームスパン工芸への取り組みや民藝運動を提唱した柳宗悦との交流などについて、関係資料とともにご紹介します。

（学芸調査員 因幡 敬宏）

関連行事

❖ 講演会（※聴講無料、申込不要）

「ホームスパン作家、及川全三の足跡をたどって」

講師：菊池 直子 氏（岩手県立大学盛岡短期大学部教授）

日時：12月9日（土）13：30～15：00

場所：花巻市博物館 講座体験学習室

花巻市内の共同企画展開催施設にてスタンプラリーやバスツアーを実施します。

詳しくは市生涯学習課へ（☎0198-24-2111）

花巻人形展 せんしばんこう ～千紫万紅～

期間：平成30年2月17日(土)～5月6日(日)

花巻人形は、岩手県花巻で江戸時代後期から200年以上に渡り作られてきた土人形です。京都の伏見人形と仙台の堤人形の流れを汲み、独自に発展しました。

東北地方には、各地に特色のある土人形がありますが、仙台の堤人形、米沢の相良人形と並び、「東北三大土人形」と称されています。

花巻人形にはいくつかの特徴があります。ひとつには、蘇芳の赤と群青の鮮やかな組み合わせの色彩があげられます。特にこの蘇芳の赤色にはこだわりがあり、職人によって独自の配合があるといわれています。



蘇芳の赤が特徴的な
「夜寒お春」

次にあげられるのは、梅や桜、牡丹といった花模様が人物の衣装に描かれていることです。また、猫や犬などの動物にも色彩豊かな花模様が描かれ、素朴な土人形を華やかに演出し、見るものを惹きつけます。



馬乗り殿様



猫

さらに題材の豊富さがあげられ、2,000種類ともいわれています。同じ題材でも形状の違いによって多種多様な表情を見せています。当館では現在、約3,500点の花巻人形を所蔵しており、毎年その数は増え続けていますが、平成27年度に調査した際、257種類とまだまだ遠く及びませんでした。

これは江戸時代より現在までの長い間、各時代の風習や情景を反映させながら作り続けられているためであり、職人によっても違いがあるといわれています。

2015（平成27）年4月から一年にわたり、当館

館長の高橋信雄が「祈りと遊び—花巻人形の世界」を岩手日報で連載しました。今回の展示では、掲載した花巻人形を中心にをご紹介します。



牛乗り天神

「牛乗り天神」は学問の神様として知られる菅原^{すがわら}道真^{みちざね}（845～903）のことで、胸に梅鉢模様がつけられているのが特徴です。牛に乗っているこの花巻人形は、道真公の亡骸を牛車で運ぶ途中に、悲しみのあまり牛が突然動かなくなったという故事に基づいて制作された人形です。また、道真公は丑年生まれであったと言う説もあります。

犬は安産と子どもの成長を願う象徴とされ、人と犬が戯れている作品が数多く残されています。

古くから安産祈願に犬張子^{いぬはりこ}が作られていました。犬張子は、出産のお守りや嫁入り道具のひとつともなっていました。妊娠5ヶ月ぐらいの戌^{いぬ}の日には、安産祈願のため宮参りをし、生後1ヶ月で行われる

初宮参りでも、子どもの成長を祈願し犬張子が使われます。このように犬は子どもを守る役割を担ってきました。



犬と童子



犬

さて、「花巻人形展～千紫万紅～」と題し紹介しますが、千紫万紅とは、さまざまな花のこと。また、色とりどりの花が咲き乱れているさま。そのように彩が豊かなことのたとえです。色彩豊かな花巻人形にぴったりな言葉ではないでしょうか。素朴で愛らしい花巻人形をお楽しみください。



布袋唐子

(学芸員 小原 伸博)

▼館長講座-3 (聴講無料、申込不要)

テーマ：「花巻人形の魅力」

日時：平成30年2月17日(土) 13:30～

場所：花巻市博物館 講座体験学習室

▼展示解説会 (入館料必要、申込不要)

日時：平成30年3月17日(土) 13:30～

場所：花巻市博物館 企画展示室

▼花巻人形絵付け体験 (事前申込必要 TEL 32-1030 まで)

日時：平成30年3月25日(日) 13:30～15:00

場所：花巻市博物館 講座体験学習室

講師：平賀工芸社 平賀恵美子 氏

料金：1,500円～(絵付けの人形により変わります)

▼篠笛演奏会 (鑑賞無料、但し展示室見学の場合は入館料必要)

日時：平成30年4月8日(日)

一部 10:30～12:00

二部 13:00～14:30

※時間等変更になる場合があります。

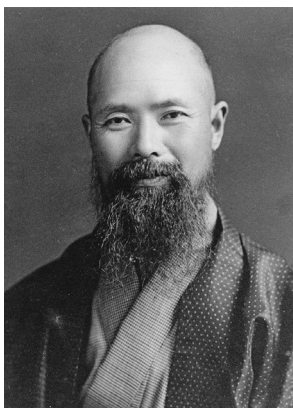
■はじめに 2017（平成29）年10月、「齋藤宗次郎資料」が当市に寄贈されました。

同資料は齋藤宗次郎の孫にあたる京都の児玉佳與子氏（旧姓齋藤）宅で保管されていたもので、宗次郎によって1898（明治31）年から1968（昭和43）年に記された70年間にわたる膨大な日記や書簡、写真アルバム類を中心とした資料群です。

■齋藤宗次郎という人物 齋藤宗次郎は1877（明治10）年に東和賀郡笹間村（現花巻市）にある東光寺の住職・轟木東林とどろきとうりんの三男として生まれ、後に人物を見込まれて子供のいなかった齋藤家の養子となります。そもそも寺院の住職となるべく育った宗次郎は、キリスト教を排斥する立場の考え方に傾倒しており、内村鑑三うちむらかんぞう（明治～昭和初期のキリスト教思想家、後に宗次郎の師となる）を憎むほどであったと記しています。

ところが、日記を書き始める頃になると、宗次郎は内村鑑三の著作を愛読するようになり、1900（明治33）年には豊沢川のほとりで洗礼を受け、キリスト教徒として歩み始めます。そして、その苦難の人生を予言するように、自らの号を「にけい二荊」（「喜」と「苦」の2つのK、イエスの荊の冠を再びする＝十字架を負う生涯の意味）と名付けます。後に宗次郎は自らの日記を読みやすいように書き改め、代表作といわれる「二荊自叙伝」が成立します。

また、1903（明治36）年には日露戦争に対し非戦論を貫くため兵役・納税義務の拒否を決意しますが、これは内村鑑三の説得により翻意されます。「真



齋藤宗次郎（写真当館所蔵）

理と真理の応用は別物だ」というのです。非戦論を徹底的に実践して、周囲の人間を不幸にしては本末転倒で聖書の曲解だという内村の教えは宗次郎の心に強く響いたようです。しかし、すでに県当局から睨まれた宗次郎は、小学校教員の職を

失い、新聞取次店「求康堂」を経営し、新聞・書籍の販売で生計を立てるようになりました。

そして、1926（昭和元）年、内村鑑三を慕って永住を決意して東京へ引っ越し、内村に付き従うようになります。内村は晩年多くの弟子に裏切られますが、齋藤宗次郎だけはその死に至るまで世話を続けました。晩年は内村の全集なども編集発行しています。

■齋藤宗次郎資料の重要性 宗次郎資料からは、強い信仰や非戦論を説くキリスト者としての宗次郎と、家庭の中で家族を温かく見守り導く家庭人としての宗次郎という、ふたつの側面を見ることができま。しかも、齋藤宗次郎の人となりだけでなく、明治・大正期の花巻の様子、地方や東京におけるキリスト教徒の生活なども読み取ることができる、膨大かつ貴重な資料群です。

■齋藤宗次郎と宮沢賢治 齋藤宗次郎は花巻にいる間、宮沢賢治とも交流がありました。1924（大正13）年の日記には、花巻農学校在職中の宮沢賢治が集金に来た宗次郎を招き入れ、ともに音楽を楽しんだり、賢治の詩「永訣の朝」のゲラ刷りを見せられたりしたという記述があります。

齋藤宗次郎と宮沢賢治は宗派の違いこそあれ、ともに実家の宗教と異なる宗派に入れ込み、没頭し異端視されたという点で共通項があります。賢治と宗次郎は互いに親しみを感じていたのかもしれませんが。

実際に賢治の散文詩「冬のスケッチ」には宗次郎をもじったと思われる「加藤宗二郎」という人物が出てきますし、一説には賢治の亡くなる直前に記された「雨二モマケズ」の詩中に見える「デクノボー」のモデルは、齋藤宗次郎であるとも言われ、死を直前にした宮沢賢治に「そういうものに私はなりたい」と思わせたのです。

■おわりに 当該資料は明治・大正期の花巻の様子を伝えてくれる貴重な資料です。また、花巻の先人である宮沢賢治に影響を与えた齋藤宗次郎、その関連資料が故郷花巻に里帰りするのは、当市にとって幸いなことといえるでしょう。

（学芸員 小田桐 睦弥）

館長 コラム

とやがさき 鳥谷崎

平成29年度のテーマ展「花巻城展」は、9月16日より開催されている。注目される展示に花巻城を中心とした絵図がある。江戸時代に描かれた絵図5鋪が並べられており、比較しながら見るとそれぞれに特徴があって興味深い。

江戸時代1850（嘉永3）年の『花巻古図』は、城を中心として花巻城下全体が描かれている。その三の丸南東の突き出た部分に「鳥谷ヶ崎」と記されている。また、『花巻城図』にも同じ三の丸の南東に突き出た個所に「鳥谷崎又八十八ヶ崎」と書かれている。現在の鳥谷崎神社から南東方向に突き出た部分である。崎は台地が平野部に飛び出す地形に使われることから、この一帯は鳥谷ヶ崎という地名であったと推定される。

江戸時代の紀行家として名高い菅江真澄は、1785（天明5）年に花巻を訪れ、伊藤脩宅に滞在している。伊藤脩は、医師として花巻城に仕える傍ら、花巻地方の文人としても活躍した俳人であり、俳号を鶏路という。芭蕉

の俳風を取り入れた俳句の指導を行い、稗貫和賀二郡の主宰として、中央の句集にも多くの作品を残している。真澄が記した『けふのせば布』に伊藤宅からの帰りに左側に鳥屋崎の城があったとあり、昔安倍頼義の陣があった琵琶柵だと聞いたと記されている。琵琶柵とはかく、花巻城の南東部分が当時にも鳥谷崎城と認識されていた証であろう。

鳥谷崎城は、稗貫郡の中世領主稗貫氏の居城である。1590（天正18）年豊臣秀吉による奥州仕置により、稗貫氏は領地を追われる。鳥谷崎城には浅野長吉（後の長政）が入り、秀吉の直轄地となる。翌1591年九戸政実の乱による秀吉の奥州再仕置後、稗貫郡和賀郡は、南部氏に与えられる。南部信直は、北秀愛に稗貫・和賀郡の8000石を与え、城代に任ずる。その後同年末に秀愛は、鳥谷崎城を花巻城に改める。

鳥谷崎城の実態は不明である。しかし、鳥谷ヶ崎の地名は、花巻城の南東端に位置することは確かであり、城の中心は台地の南端にあったと推定される。一方、花巻城の本丸は台地の北端にある。花巻城は、鳥谷崎城から単に名前を変えただけではないと考えられる。

行事予定

平成29年12月～平成30年3月

企画展示室

●共同企画展

「及川全三と岩手のホームパン」
会期：12月9日（土）～1月28日（日）
休館日：12月28日（木）～1月1日（月）

◇講演会

「ホームパン作家、及川全三の足跡をたどって」
講師：菊池直子氏（岩手県立大学盛岡短期大学部教授）
日時：12月9日（土）13：30～
場所：花巻市博物館 講座体験学習室

●テーマ展 「花巻人形展～千紫万紅～」

会期：2月17日（土）～5月6日（日）

◇展示解説会

日時：3月17日（土）13：30～

講座・体験学習

【講座】

12月3日（日） 古文書講座-3
2月17日（土） 館長講座-3
「花巻人形の魅力」

*初級・中級あり
初級：10:00～11:30
中級：13:30～15:00

【体験学習】

3月25日（日） 花巻人形絵付け



絵付け体験の様子



完成した花巻人形

※内容に変更がある場合があります。
※時間は古文書講座以外全て13時30分～

花巻市博物館

〒025-0014 岩手県花巻市高松 26-8-1
電話：0198-32-1030 FAX：0198-32-1050
開館時間：午前8時30分から午後4時30分まで
休館日：12月28日から1月1日まで

入館料	小学生・中学生	150(100)円
	高校生・学生	250(200)円
	一般	350(300)円

※（ ）内は20名以上の団体割引料金
※割安な近隣4館共通券もあります。
※特別展示を行う場合、入館料を定める場合があります。

交通案内

- 東北新幹線
新花巻駅より車で3分
- 東北本線
花巻駅より車で約15分
- 金石自動車道
花巻空港I.C.より車で約5分
- バス
新花巻駅より約5分
岩手県交通 土沢線
イトーヨーカドー行
賢治記念館口下車



◇ URL <http://www.city.hanamaki.iwate.jp/bunkasports/501/hanamakisihakubutukan/>

花博 コレクション

Hanahaku collection



はなまきとやがさきじょうこず うつし
花牧鳥屋ヶ崎城古図 (写) 藤木融之丞筆 嘉永7年(1854)写 43.7×53.0cm

この絵図は、図中に記される人名などから1740年代に作成されたものと考えられ、それを幕末に藤木融之丞が写したものです。表題は花巻を花牧、鳥谷崎を鳥屋ヶ崎と宛て字を使用しています。略図ではありますが、濁御堀（現在の花巻市役所地下駐車場など）の深さが8尺（約2.4m）、幅が11間（約20m）など堀の大きさについての情報や、本丸（現在の鳥谷崎公園）の広さが東西113間（約200m）、南北40間1尺（約72m）など、各郭の広さについても記されています。大手門、円城寺門（羽手門）および中御門、早坂御門や西御門は2階を構えた櫓門として描かれており、御台所御門や不明御門、馬場口御門は1段で描かれています。幕末の絵図では「武者だまり」と記される場所には「上野山」と書かれており、呼ばれ方が異なったようです。このように、この絵図は江戸時代中期の花巻城および城下町の様子を知ることのできる資料となっています。

また、この絵図は常設展示室に展示されており、いつでもご覧いただけるようになっています。

(学芸員 小田桐 睦弥)